



漆垣内地内字とうこうじの山上に永禄年間まで東光寺という真言寺があった。

昭和 5 年 6 月岡村利平が、今井孫康、森久一郎らの案内で実地踏査した記事が飛騨史壇昭和 5 年 8 月号に出ている。記事の概要は

この跡地は元服山続きの台上で、東南西は低く眺望開闊、寺は南面したものであろう。今は畑地となっているが布目瓦が出る。この日も今井君が破片を 1 個拾った。この跡地の畑から金銅製の釈迦の像がかつて出土した。

今より 40 年ほど前(明治 9 年頃)漆垣内の都竹捨次郎の母が畑を耕作中発見したものである。この母はまだ健在で名はちかかといひ当年 65 歳である。その老婆の案内で出土現地も見たが東光寺の境内と思われる地のやや東側へよった箇所である。仏像は釈迦の降誕像で身長台共に 2 寸 8 分、台下の挿込の部分が 4 分、この挿込にて別の台に挿込んであったものであろう、重量 30 匁、地金は銅で上に鍍金したものである、下部の剥げた部分に緑青の錆が浮いている、灌仏会に甘茶をそそぐ釈迦像であらう、(以下略)

布目瓦の出土地であれば奈良時代か平安時代の初めにすでにあつた寺と考えられる。漆垣内地内には二宮神社、四天王神社がある、両者共歴史時代の神社としては本村で最も古く、上代この地が文化の一中心をなしていたことが考えられる。

東光寺は山口の来迎寺と共に後代千光寺の末寺で、永禄 7 年(1564)に武田勢のために焼かれたと伝えられている。当時千光寺は国内の一大教団で、その末寺末院別当社もおびたしい数であつた。

<引用文献>

荒川喜一編纂『大八賀村史』416 頁 大八賀財産区発行 昭和 46 年



0001_推定地付近



0002_推定地付近



0003_推定地付近



0004_推定地付近



0005_推定地付近



0006_推定地付近



0007_推定地付近



0008_推定地付近



0009_推定地付近



0010_推定地付近



0011_推定地付近



0012_近景



0013_近景



0014_近景



0015_近景



0016_近景



0017_近景



0018_近景



0019_近景



0020_近景



0021_近景



0022_近景



0023_近景



0024_遠景



0025_遠景



0026_遠景



0027_遠景



0028_遠景



0029_遠景



0030_遠景



0031_遠景



0032_遠景



0033_遠景



0034_遠景



0035_遠景



0036_遠景



0037_遠景



0038_遠景



0039_遠景



0040_遠景



0041_遠景



0042_遠景



0043_遠景



0044_遠景



0045_遠景



0046_遠景



0047_遠景



0048_遠景



0049_遠景



0050_遠景



0051_遠景



0052_遠景



0053_遠景



0054_遠景



0055_遠景



0056_遠景



0057_遠景



0058_遠景



0059_遠景



0060_遠景



0061_遠景